

コア科目

一般教育科目

総合科目 総合コース

平成7年度

学問と私 (95前-I)
(95後-I)

心と体 (95前-II)
(95後-II)

少子化時代の子どもと家族 (95前-III)



お茶の水女子大学

女性文化研究センター

平成7年度

総合科目 総合コース

開設講義

- ◇『学問と私』 (95前-I) 前期 水曜日 5・6時限
- ◇『学問と私』 (95後-I) 後期 水曜日 7・8時限

- ◇『心と体』 (95前-II) 前期 水曜日 7・8時限
- ◇『心と体』 (95後-II) 後期 水曜日 5・6時限

- ◇『少子化時代の子どもと家族』 (95前-III) 前期 水曜日 5・6時限

-
- ◇※『生と死』 (95後-IV) 後期 水曜日 5・6時限

※ 講義テキストは後期開講時に配付する。

(末巻)

後期開講
資料出典
資料調査一七三
資料一七三

平成7年度

総合科目 総合コース

目次

◇『学問と私』 (95前-I)	前期	水曜日	5・6時限	
◇『学問と私』 (95後-I)	後期	水曜日	7・8時限	
・講義テーマと担当講師			I-i
・講義日程 前期授業			I-ii
・講義日程 後期授業			I-iii
・参考文献等			I-1
◇『心と体』 (95前-II)	前期	水曜日	7・8時限	
◇『心と体』 (95後-II)	後期	水曜日	5・6時限	
・講義テーマと担当講師			II-i
・講義日程 前期授業			II-ii
・講義日程 後期授業			II-iii
・講義概要			II-1
◇『少子化時代の子どもと家族』 (95前-III)	前期	水曜日	5・6時限	
・講義テーマと担当講師			III-i
・講義日程			III-ii
・講義概要			III-1

(巻末)

- 図書館活動
- 授業出席票
- セミナー質問用紙
- レポート表紙

総合コース

- ◇『学問と私』 (95前-I)
- ◇『学問と私』 (95後-I)

総合コースは、共通な一つの主題について、専攻や専修の異なる学生が協同して学ぶものである。

テーマの概要

さまざまな専門分野の先生による大学での学習のサポートである。各分野の先生からさまざまな道を通り、さまざまなものの影響を受けながら、自分の専門を学ぶことにより、それを知ることによって大学での学習の意欲を高める。これが『学問と私』の目的である。

対象学年：1年～4年

履修単位数：2単位（前期または後期）

※1 前期または後期いずれかの授業を履修する。

※2 既に何れか『学問と私』を履修した学生は、単位取得が認められる。

※ 複数の履修を履修した場合、卒業までに合計2単位以内とする。

セミナー：講義担当講師との協働授業を中心としたセミナーを行う。履修する学生は、必ず出席すること。

◆前期授業：7月14日 ◆後期授業：11月31日

講義担当教員に質問事項がある場合は、所定の質問票に記入の上、所属学部事務室（前期授業：7/14日、後期授業：11/31日）まで提出すること。

図書館活動：学生の自主的行動日として、『図書館活動日（学問と私）』を設ける。

◆前期授業：7月14日 ◆後期授業：11月31日

試験方法：試験はレポートにより行う。レポート課題の教員が指定する。

(出題日) ◆前期授業：7月14日 ◆後期授業：11月31日
学生は、指定に従ってレポートを作成し、この巻末の表紙を添付の上、締切り日までに所属学部事務室へ提出すること。

(締切り日) ◆前期授業：7月23日 ◆後期授業：12月17日
(卒業で完了は、2月15日)

参考文献：参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは購入を可能のものをお勧めする。

総合コース

- ◇「学問と私」(95前-I) 水曜日 5・6時限
- ◇「学問と私」(95後-I) 水曜日 7・8時限

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教官が講義するもので、総合的な視野から学ぶものである。

テーマの概要

さまざまな専門分野の先生による大学での学習への手引きである。先生がたは、さまざまな道を通り、さまざまなものを受けながら、「自分の学問」をつくってこられた。それを知ることによって大学での学習の意味をつかむ。これが「学問と私」の狙いである。

対象学年 : 1年～4年

履修単位数 : 2単位。(前期または後期)

※1 前期または後期いずれかの授業 2単位。

※2 既に同テーマ「学問と私」を履修した学生は、単位修得が認められない。

※ 複数の講義を履修した場合、卒業までに合計8単位認められる。

セミナー : 講義担当講師との質疑応答を中心とした「セミナー」を行う。履修する学生は、必ず出席すること。

◆前期授業 — 7月19日 ◆後期授業 — 1月31日

講義担当教官宛に質問事項がある場合は、所定の質問票に記入のうえ、所属学部事務室(前期授業-7/13、後期授業-1/25まで)へ提出すること。

図書館活動 : 学生の自主的行動日として、「図書館活動日」(巻末参照)を設定している。

◆前期授業 — 7月26日 ◆後期授業 — 2月7日

試験方法 : 試験はレポートにより行う。レポート課題等の詳細については、別途指示する。

(出題日) ◆前期授業 — 7月19日 ◆後期授業 — 1月24日

学生は、指示に従ってレポートを作成し、この巻末の表紙を添付の上、締切り日までに所属学部事務室へ提出すること。

(締切り日) ◆前期授業 — 9月29日 ◆後期授業 — 2月16日

(卒業予定者は、2月6日)

参考文献 : 参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは入手可能なものをあげた。

総合コース

- ◇「学問と私」(95前-I) 水曜日 5・6時限
- ◇「学問と私」(95後-I) 水曜日 7・8時限

[講義テーマ]

[担当講師(アウエオ順)]

芸術と科学	板倉 壽郎	I-1
確率論と私	笠原 勇二	I-2
地理学とフィールドワーク -パプアニューギニア 調査の体験から-	熊谷 圭知	I-3
イタリアで学んだこと -タルクィニアの発掘から-	鷹野 光行	I-4
着心地の科学-汗を中心に	中島 利誠	I-5
音楽について考える	永原 恵三	I-6
哲学の話題	羽入 佐和子	I-7
象をなでる群盲の一人として -液晶研究の一側面-	堀 佳也子	I-8
子ども・家族研究と家庭科教育学	牧野 カツコ	I-9
「鬼畜米英」との戦いの中から	湊 和夫	I-10
日本中世史の面白さ	安田 次郎	I-11
距離と近さ	渡辺 ヒサ子	I-12

(巻末)

- 図書館活動
- 授業出席票
- セミナー質問用紙
- レポート表紙

平成7年度(前期授業)

「学問と私」(95前-I) 講義日程

開講日時: 水曜日 5・6時限 13:20~14:50 (一般教育2号館101室)

前		期	
月	日	月	日
4	19	6	21
	26		28
5	10	7	5
	17		12
	24		19
	31		26
6	7	9	20
	14		

講義テーマ 担当講師 (所属学科) 専攻分野	講義テーマ 担当講師 (所属学科) 専攻分野
音楽について考える 永原 恵三 助教授 (音楽) 音楽美学	哲学の話題 羽入佐和子 助教授 (哲学) 哲学
イタリアで学んだこと -タルクィニアの発掘から- 鷹野 光行 助教授 (教育) 博物館学・考古学	地理学とフィールドワーク -パプアニューギニア 調査の体験から- 熊谷 圭知 助教授 (地理) 社会文化地理学
芸術と科学 板倉 壽郎 教授 (人間生活) 美学-流行情報論	子ども・家族研究と 家庭科教育学 牧野カツコ 助教授 (人間生活) 家族社会学
確率論と私 笠原 勇二 教授 (情報) 確率論	日本中世史の面白さ 安田 次郎 助教授 (史学) 日本中世史
象をなでる群盲の一人として -液晶研究の一側面- 堀 佳也子 助教授 (化学) 物理化学	セミナー
着心地の科学-汗を中心に 中島 利誠 教授 (生活工学) 高分子化学・ 繊維化学・感覚工学	図書館活動
「鬼畜米英」との戦いの中から 湊 和夫 教授 (英文) 7/11政治・社会	(試験期間)
距離と近さ 渡辺ヒサ子 教授 (数学) 解析学	

平成7年度(後期授業)

「学問と私」(95後-I) 講義日程

開講日時:水曜日7・8時限 15:00~16:30 (一般教育2号館201室)

後		期			
月	日	講義テーマ 担当講師 (所属学科) 専攻分野	月	日	講義テーマ 担当講師 (所属学科) 専攻分野
10	4	イタリアで学んだこと —タルクィニアの発掘から— 鷹野 光行 助教授 (教育) 博物館学・考古学	12	6	音楽について考える 永原 恵三 助教授 (音楽) 音楽美学
	11	芸術と科学 板倉 壽郎 教授 (人間生活) 美学(流行情報論)		13	象をなでる群盲の一人として —液晶研究の一側面— 堀 佳也子 助教授 (化学) 物理化学
	18	「鬼畜米英」との戦いの中 湊 和夫 教授 (英文) 7月政治・社会	1	17	日本中世史の面白さ 安田 次郎 助教授 (史学) 日本中世史
	25	確率論と私 笠原 勇二 教授 (情報) 確率論		24	地理学とフィールドワーク —バグニューギニア 調査の体験から— 熊谷 圭知 助教授 (地理) 社会文化地理学
11	1	着心地の科学—汗を中心に 中島 利誠 教授 (生活工学) 高分子化学・ 繊維化学・感覚工学	2	31	セ ミ ナ ー
	8	子ども・家族研究と 家庭科教育学 牧野カツコ 助教授 (人間生活) 家族社会学		7	図 書 館 活 動
	15	距離と近さ 渡辺ヒサ子 教授 (数学) 解析学	14	(試験期間)	
	22	哲学の話題 羽入佐和子 助教授 (哲学) 哲学	※12/20、1/10は、予備日。		

「学問と私」(95前-I)

「学問と私」(95後-I)

芸術と科学

(担当講師) 板倉 壽郎

(所属学科) 生活科学部 人間生活学科
生活文化学講座

(専攻分野) 美学(流行情報論)

1967年ジョルジー・ケペッシュによって、マサチューセッツ工科大学に高等視覚研究所が創設された。この研究所は大学の強力な自然科学及び工学のスタッフを背景に過去の科学と芸術の対立的関係を超越し、新しく両者の協働の場を創ろうとするものであった。この研究所の活動を中心に芸術と科学の関係を考察する。

〔参考文献〕

ジョルジ・ケペッシュ 著 佐波 甫、高見堅志郎 訳

『造形と科学の新しい風景 (The new landscape in art and Science)』

東京;美術出版(1966年)

確率論と私

(担当講師) 笠原 勇 二

(所属学科) 理学部 情報科学科

(専攻分野) 確率論

[参考文献]

伊藤 清 著『確率論』 岩波書店(1953年)

地理学とフィールドワーク

—パプアニューギニア調査の体験から—

(担当講師) 熊谷 圭 知

(所属学科) 文教育学部 地理学科

(専攻分野) 社会文化地理学

私の専門は地理学です。地理学と聞くと、地形や地質といった自然環境にかかわりの深い学問という「硬い」イメージがあるかもしれませんが。でも私がやっているのは、社会や文化といった、人間の問題を考える地理学です。なかでも、私がずっとかかわり続けているのは、パプアニューギニアという国です。私が最初に文部省の留学生としてパプアニューギニア大学に行ったのは、まだ修士課程に在学中の、1979年末のことですから、もうかれこれ15年以上、この地域とそこに住む人々とつき合い続けていることとなります。パプアニューギニアで私が訪ねるのは、時には広大なジャングルや湿地帯に囲まれた奥地の村であったり、また農村から出てきた人たちが都市に作った掘立小屋集落であったりします。そこで、私が研究のためにとるのは、いわゆる参与観察(participant observation)と呼ばれる方法であり、一時的にせよその社会に入り込み、その人々と一緒に暮らしながら、あれこれ観察をしたり、話を聴いたりしてデータを集めるというやり方です。しかし、実際にはこちらが「観察」する以上に、周囲の人々から観察されるという役回りを引き受ける方がはるかに多いものです。そんな中で、異なる風土や人々と出会う楽しみとともに、いろいろな失敗や苦勞もあります。また他者(異文化)を理解することの難しさに思い悩むこともしばしばです。この講義では、そんなパプアニューギニアでのフィールドワークを通じて自分なりに考えたこと、そしてまた地理学という学問にとって、フィールドワークがもつ意味について語ってみたいと思います。

[参考文献]

熊谷圭知 著「ポートモレスビーにおける都市移住者の居住とセグリゲーション：都市-農村関係の視点から」、熊谷圭知・塩田光喜 編『マタンギ・パシフィカ：太平洋島嶼国の政治・社会変動』アジア経済研究所, pp.123-173 (1994年)

熊谷圭知 著「『理解』と『共感』のあいだから」『地理』37-11, pp.70-73. (1992年)

熊谷圭知 著「現代を生きるニューギニア高地の人々」『地理』34-7, pp.39-46. (1989年)

熊谷圭知 著「タイム・バルス・イ・カム：パプアニューギニア、ミアンミン族における西欧世界との接触と社会変容」, 『阪南論集』人文・自然科学 編, 23-4, pp.1-20. (1988年)

「学問と私」(95前-I)
「学問と私」(95後-I)

イタリアで学んだこと

— タルキニアの発掘から —

(担当講師) 鷹野 光 行

(所属学科) 文教育学部 教育学科

(専攻分野) 博物館学・考古学

[参考文献]

月刊文化財発掘出土情報増刊号『最新海外考古学事情』

ジャパン通信社(1994年)

青柳正規 著『皇帝たちの都ローマ』中公新書(1992年)

「学問と私」(95前-I)
「学問と私」(95後-I)

着心地の科学

— 汗を中心に —

(担当講師) 中 島 利 誠

(所属学科) 生活科学部 生活工学

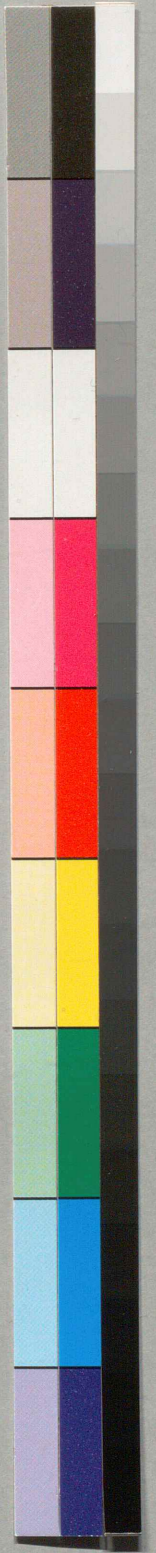
(専攻分野) 高分子化学・繊維化学・感覚工学

学問という難しい言葉と難しい理論を駆使する分野と考えやすいが、本来、学問は身近な問題を対象に身近な言葉を用いて生まれたものである。ここでは、着心地という一番身近な問題を身体-衣服-環境系での水分と熱のバランスという視点で捉えた着心地の科学の一端を紹介したいと思う。

[参考文献]

ホーズ、ゴードン 共著、中島利誠 訳『着心地の科学』 光生館(1986年)

中島利誠、小林彰夫 共著『生活と環境』 垣内出版(1989年)



「学問と私」(95前-I)

「学問と私」(95後-I)

音楽について考える

著者 永原 惠三 (担当講師)

(所属学科) 文教育学部 舞踊教育学科
音楽教育学

(専攻分野) 音楽美学

[参考文献]

柴田南雄 著『声のイメージ』 東京；岩波書店(1990年)

柴田南雄 著『日本の音を聴く』 東京；青土社(1987年)

木村 敏 著『あいだ』 東京；弘文堂(1988年)

小川博司、庄野泰子、田中直子、鳥越けい子 編著

『波の記譜法』 東京；時事通信社(1986年)

「学問と私」(95前-I)

「学問と私」(95後-I)

哲学の話題

著者 羽入 佐和子 (担当講師)

(所属学科) 文教育学部 哲学科

(専攻分野) 哲学

[参考文献]

カール・ヤスパース 著、林田新二 訳『哲学とは何か』 白水社(1978年)

ジョン・ホズバース 著、斎藤哲郎 監修『分析哲学入門』全五巻 法政大学出版局

「学問と私」(95前-I)

「学問と私」(95後-I)

象をなでる群盲の一人として

— 液晶研究の一側面 —

(担当講師) 堀 佳也子

(所属学科) 理学部 化学科

(専攻分野) 物理化学

軽小短薄の時代の要請に応える表示材料として市場に出回っている液晶であるが、基礎的観点からも、さまざまな研究がなされており、その様子のある研究者は「群盲、象を撫ず」にたとえている。象を理解するためには、できるだけ多くの群盲がさまざまな角度、観点から象にさわって、知り得た情報を互いに交換することが必要である。本講義では、液晶を1つの材料として、自然科学の研究の方法論の一端を述べたい。

〔参考書〕

A. ギニエ 著、土井健治 訳『物質の構造 上下』共立出版(1983年)

「学問と私」(95前-I)

「学問と私」(95後-I)

子ども・家族研究と家庭科教育学

(担当講師) 牧 野 カツコ

(所属学科) 生活科学部 人間生活学科

生活社会科学講座

(専攻分野) 家族社会学・家庭科教育学

〔参考文献〕

望月 嵩 他編『現代家族の危機』有斐閣(1985年)
牧野カツコ監訳『ティーン・ガイド 一人間と家族について学ぶ
アメリカの家庭科教科書』家政教育社(1991年)
牧野カツコ監訳『続ティーン・ガイド 一衣生活と食生活について学ぶ
アメリカの家庭科教科書』家政教育社(1994年)

「学問と私」(95前-I)

「学問と私」(95後-I)

「鬼畜米英」との戦いの中から

(担当講師) 湊 和夫

(所属学科) 文教育学部 外国文学科
英文学・英語学
(専攻分野) アメリカ政治・社会

[参考文献]

金原左門、竹前栄治 編『昭和史』有斐閣選書(1982年)
青木 保 著『日本文化論の変容 —戦後日本の文化とアイデンティティー—』
中央公論社(1990年)

注) 第2次世界大戦後、世界各地で起きた戦争について、ひとつおりの予備知識を身に付けておいてください。

例: 朝鮮戦争、ベトナム戦争、第1~4次中東戦争、イラン・イラク戦争、
湾岸戦争、フォークランド戦争、印パ戦争など。

「学問と私」(95前-I)

「学問と私」(95後-I)

日本中世史の面白さ

(担当講師) 安田 次郎

(所属学科) 文教育学部 史学科
(専攻分野) 日本中世史

[参考文献]

勝俣鎮夫 著『一揆』岩波新書・黄194(1982年)
笠松宏至 著『徳政令—中世の法と慣習—』岩波新書・黄218(1983年)
網野善彦、石井進、笠松宏至、勝俣鎮夫 共著『中世の罪と罰』東大出版
(1983年)

「学問と私」(95前-1)

「学問と私」(95後-1)

距離と近さ

渡辺 安 (担当講師) 渡辺 ヒサ子

(所属学科) 理学部 数学科

(専攻分野) 解析学

私達が通常使っている「遠い」、「近い」という言葉には、何か1つの基準になるものがあり、それで計って「遠い」とか「近い」という。それ等の基準になるものとは、どんなものであろうか。それ等を通じて、数学の日常生活へのかかわり方の一端を見る。

[参考文献]

遠山 啓 著『無限と連続』 岩波新書(1952年)

遠山 啓 著『数学入門 上・下』 岩波新書(1959年)

総合コース

◇「心と体」(95前-1) 大塚 昌之

◇「心と体」(95後-1) 大塚 昌之

総合コースは、共通な一つの主題について、前期後期の両方で複数の講義が実施される形式で、総合的な視野から学ぶものである。

総合コースの概要

大学生活4年間は、さまざまな「問題」に直面している。これらを乗り越え、自分の生き方を確立し、それを支える確かな知識・技術を身につけていくことが、そこでの課題である。この課題解決のためにも、その基礎となる「心と体」の鍛錬は大事である。又、ある「問題」を克服するための手掛かりを身につけることも必要である。

対象学年 : 1年~4年

履修単位数 : 2単位。(前期または後期)

※1 前期または後期のいずれかの授業を選択。

※2 既に「心と体」を履修した学生は、単位の割増が認められない。

※ 複数の講義を履修した場合は、卒業までに履修単位が認められる。

履修条件 : 履修担当講師との相談が必要である。また、履修する学生は、必ず出席すること。

◆前期授業 : 9月29日(木) 15:00~16:30

◆後期授業 : 12月1日(土) 9:00~10:30

履修担当教員宛に履修希望がある場合は、所属の学務員に記入した履修希望書(前期授業 : 9月29日、後期授業 : 11月27日)を提出すること。(共通教務課への提出は、できません。所属の学務員へ提出すること。)

履修時注意 : 学生の自主的行動に基き、前期後期とも「履修希望」を履修しない場合は、必ず出席すること。

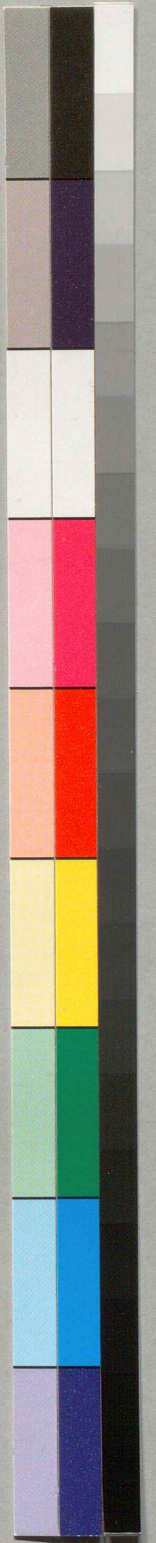
◆前期授業 : 9月29日(木) 15:00~16:30

◆後期授業 : 12月1日(土) 9:00~10:30

履修方法 : 試験はレポートにより行う。レポートは履修希望書に添付して提出すること。(後期日) ◆前期授業 : 9月29日(木) 15:00~16:30 ◆後期授業 : 12月1日(土) 9:00~10:30 学生は、指示に従ってレポートを作成し、この授業の進捗を踏まえ、締切り日までに所属の学務員へ提出すること。

(後期日) ◆前期授業 : 9月29日(木) 15:00~16:30 ◆後期授業 : 12月1日(土) 9:00~10:30 (卒業認定日は、2月4日)

履修注意 : 参考文献には、なるべし所属の学務員宛にあるもの、あるいは、所属の学務員宛に提出すること。



総合コース

- ◇「心と体」(95前-II) 水曜日 5・8時限
- ◇「心と体」(95後-II) 水曜日 5・6時限

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教官が講義するもので、総合的な視野から学ぶものである。

テーマの概要

大学生活4年間は、さまざまな「冒険」に満ちている。これらを乗り越え、自分の生き方を確立し、それを支える確かな知識・技術を身につけていくことが、そこでの課題である。この課題解決のためにも、その基盤となる「心と体」の問題は大事である。実りある大学生活を送るための手掛かりを与えるものとして開講された。

対象学年 : 1年～4年

履修単位数 : 2単位。(前期または後期)

※1 前期または後期いずれかの授業 2単位。

※2 既に同テーマ「心と体」を履修した学生は、単位修得が認められない。

※ 複数の講義を履修した場合、卒業までに合計8単位認められる。

セミナー : 講義担当講師との質疑応答を中心とした「セミナー」を行う。履修する学生は、必ず出席すること。

◆前期授業 — 7月19日 ◆後期授業 — 1月31日

講義担当教官宛に質問事項がある場合は、所定の質問票に記入のうえ、所属学部事務室(前期授業-7/13、後期授業-1/25まで)へ提出すること。
(非常勤講師への質問は、できるだけ講義時間内にすること。)

図書館活動 : 学生の自主的行動日として、「図書館活動日」(巻末参照)を設定している。

◆前期授業 — 7月26日 ◆後期授業 — 2月7日

試験方法 : 試験はレポートにより行う。レポート課題等の詳細については、別途指示する。

(出題日) ◆前期授業 — 7月19日 ◆後期授業 — 1月24日

学生は、指示に従ってレポートを作成し、この巻末の表紙を添付の上、締切り日までに所属学部事務室へ提出すること。

(締切り日) ◆前期授業 — 9月29日 ◆後期授業 — 2月16日
(卒業予定者は、2月6日)

参考文献 : 参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは入手可能なものをあげた。

総合コース

- ◇「心と体」(95前-II) 水曜日 7・8時限
- ◇「心と体」(95後-II) 水曜日 5・6時限

[講義テーマ] [担当講師(アイウエ順)]

食品の機能 —その研究の軌跡を辿る—	荒井 綜一	II-1
食生活と健康	荒川 信彦	II-2
心理療法(カウンセリング)の考え方	飯長 喜一郎	II-3
日常生活での運動と メンタル・マネジメント	加賀 秀夫	II-4
身体意識の発達と精神病理	春日 喬	II-5
心と体—心身医学的アプローチ	末松 弘行	II-6
スポーツの中でのこころとからだ	杉山 進	II-7
心と脳	鈴木 二郎	II-8
医学と食品	永川 祐三	II-9
ストレス	野村 忍	II-10
女の一生	堀口 雅子	II-11
生涯にわたる発達	水野 悌一	II-12

(巻末)

- 図書館活動
- 授業出席票
- セミナー質問用紙
- レポート表紙

平成7年度(前期授業)

「心と体」(95前-II) 講義日程

開講日時: 水曜日 7・8時限 15:00~16:30 (一般教育2号館201室)

前		期	
月	日	講義テーマ(仮題) 担当講師	月 日 講義テーマ(仮題) 担当講師
4	19	日常生活での運動と メンタル・マネジメント (舞踊) 加賀 秀夫 教授	6 28 スポーツの中でのこころとからだ (舞踊) 杉山 進 助教授
	26	医学と食品 (保健管理センター長) 永川 祐三 教授	7 5 身体意識の発達と精神病理 (心理) 春日 喬 教授
5	10	心理療法(カウンセリング)の考え方 (発達臨床) 飯長喜一郎教授	12 心と脳 鈴木 二郎 非常勤講師 (東邦大学医学部教授)
	17	食品の機能 —その研究の軌跡を辿る— 荒井 綜一 非常勤講師 (東京大学農学部教授)	19 セミナー
			26 図書館活動
	9		20 (試験期間)
	24	ストレス 野村 忍 非常勤講師 (東京大学医学部助手)	
	31	食生活と健康 (食物科学) 荒川 信彦教授	
6	7	心と体—心身医学的アプローチ 末松 弘行 非常勤講師 (東京大学医学部教授)	
	14	生涯にわたる発達 (発達臨床) 水野悌一 教授	
	21	女の一生 堀口 雅子 非常勤講師	

平成7年度(後期授業)

「心と体」(95後-II)講義日程

開講日時:水曜日5・6時限 13:20~14:50 (一般教育2号館101室)

後		期			
月	日	講義テーマ(仮題) 担当講師	月	日	講義テーマ(仮題) 担当講師
10	4	心理療法(カウンセリング)の考え方 (発達臨床)飯長喜一郎教授	12	6	ストレス 野村 忍 非常勤講師 (東京大学医学部助手)
	11	医学と食品 (保健管理センター長) 永川 祐三 教授		13	スポーツの中でのこころとからだ (舞踊)杉山 進 助教授
	18	日常生活での運動と メンタル・マネジメント (舞踊)加賀 秀夫 教授	1	17	心と体—心身医学的アプローチ 末松 弘行 非常勤講師 (東京大学医学部教授)
	25	身体意識の発達と精神病理 (心理)春日 喬 教授		24	心と脳 鈴木 二郎 非常勤講師 (東邦大学医学部教授)
11	1	生涯にわたる発達 (発達臨床)水野悌一 教授		31	セミナー
	8	食生活と健康 (食物科学)荒川 信彦教授	2	7	図書館活動
	15	女の一生 堀口 雅子 非常勤講師		14	(試験期間)
	22	食品の機能 —その研究の軌跡を辿る— 荒井 綜一 非常勤講師 (東京大学農学部教授)			12/20、1/10は、予備日。

「心と体」(95前-II)

「心と体」(95後-II)

食品の機能

—その研究の軌跡を辿る—

荒井 綜一

食品は私たちの体と深いかわりを持つ。昨今ではこの“かわり”を身体に対する食品の働き—“機能”—という観点から研究するようになった。

食品には栄養面での働き(一次機能)と嗜好面での働き(二次機能)があるとされてきた。ところが最近、食品には免疫系・分泌系・神経系・循環系・消化系といった生理統御系を調節し、病気の発症を未然に防ぐ“第3の働き”(三次機能)があることが明らかになった。同時に、三次機能が効率よく発現するように設計された新食品である“機能性食品”の開発研究が活発になった。厚生省はこれを“特定保健用食品”という新しいカテゴリーに位置づけ、いくつかの品目の認定を開始したことから、三次機能への関心は学術的にも社会的にも一段と高まってきた。

一次機能、二次機能、三次機能の研究の流れはそのまま日本の食品学発展の歴史に符号する。食品が極端に不足していた戦前・戦中・戦後の一時期は一次機能の研究が主役であった。それが、高度経済成長期に入ると二次機能の研究が主役にとって代わった。そして、高齢化社会の到来が切実な問題として浮上してきた今日、ものを食べることによって病気を防ぎたいという人々の願望の高まりとともに、今度は、三次機能の研究が目下の焦点となったのである。

日本人の主食であるコメの食品学もこうした流れに沿って推移してきた。ビタミン栄養学の濫觴となった米糠の研究、おいしさの解明の格好の素材となった飯の研究、そしてコメ起因のアレルギー(アトピー性皮膚炎)を防ぐ機能性食品で、特定保健用食品第1号に認定されたことから海外の反映も大きい*低アレルゲン米の研究を例にして、食品の機能の研究の軌跡を辿ってみたい。

当日、プリントを配ります。

[参考文献]

* D. Swinbanks and J. O'Brien : *Nature* 364, 180 (1993年)

食生活と健康

荒川 信彦

食生活における健康志向や運動・スポーツへの積極的な参加により、健康の維持・増進を心がける人が増えてきております。健康でありたいと願わない人はいないでしょう。世界保健機構(WHO)によれば、「健康とは肉体的、精神的ならびに社会的にも完全に健全(well-being)な状態であって、単に疾病や虚弱ではないというだけではない」と定義しています。そしてまた、WHOでは“Health for All, by 21 Century”と、21世紀までに全ての人に健康をと標榜しております。しかし、現実はいかがでしょう。世界各地で起こっている紛争やそれともなう食糧不足をみても、とてもそのようには思えません。経済的、社会的あるいは精神的なものを含めて人間環境には厳しいものがあります。これらの中で本講では、私共の身体の健康を食生活の側面から見ていきたいと思えます。

わが国では近年、国民の平均寿命は大幅に伸び、世界で最長の長寿国になりました。医療の格段の進歩と食生活の改善があったからですが、その背景にはわが国の大きな経済発展があります。これにともなって社会構造や生活環境、生活者としての意識や価値観も大きく変化してきました。食生活も当然、時代を反映しながら変わってきております。

例えば、加工食品の普及や外食の増加、食事内容や食事回数など、食に関するライフスタイルの多様化や個性化がすすみ、個人あるいは世帯別にみた場合にも分極化が見られます。このような食生活の変化と私共の健康はどのようにかわり合うのでしょうか。現状を把握すると同時に、日本型食生活を考えてみたいと思っております。

〔参考文献〕

五十嵐 脩・唯是康彦 編著『食生活論』調理栄養教育公社(1994年)
食糧栄養調査会編集『1994年版 食糧・栄養・健康』医歯薬出版(1994年)

心理療法(カウンセリング)の考え方

飯長 喜一郎

心と体は、一般に考えられているほど別々のものではない。両者はお互いに密接な関係を持っている。

しかし、心理療法(カウンセリング)においては、両者の関係に対する考え方は、よって立つ立場によって相当に異なっている。そしてその立場の違いにより、心と体の扱いは全く異なってくる。その違いは、心理学における最右翼から最左翼までの違いとも言えるほどである。

本講では、この立場の違いを概観することによって、心と体の関係に関する理解を深めたい。

授業の後半では、「自律訓練法」という心と体の自己訓練法の初歩を練習する予定である。

〔参考文献〕

佐治守夫・飯長喜一郎 編著『パーソナリティ論』日本放送出版協会(1991年)
伊藤隆二・橋口英俊・春日 喬 編
『生涯発達と臨床心理学』人間の発達と臨床心理学1. 駿河台出版社(1994年)
河合隼雄 著『カウンセリングの実際問題』誠信書房(1970年)

日常生活での運動とメンタル・マネジメント

加賀 秀夫

心と体とが不可分の関係にあることは、今日では常識であるといつてよい。ところが、現代における日常生活では、電化製品をはじめとするさまざまな工業製品が普及し、日常作業の省力化が進んでいる。都市生活に限らず、人間が自分の体を使って解決する問題や仕事に限られてきて、手足を上手に使うための工夫や努力や忍耐はほとんど必要では無くなっている。一方、めまぐるしいまでの技術革新や高度情報化、そして複雑化している人間関係への適応などで、心が担う負担が極めて大きくなっている。そのことがメンタルストレスの増大に留まらず、しばしば体の不調をもたらすことは、既によく知られている。

このような状況で、生活の中にスポーツを取り入れて、いわゆる「スポーツの生活化」を実行している人々が増えつつある。スポーツは、心身の健康や生き甲斐の増進に貢献する可能性が大きい。関わり方を誤ると、かえって体の健康に留まらず心の健康にとってもマイナスの結果をもたらすものでもあり得る。

本講では、現代生活における健康の問題を、日常生活における運動とメンタル・マネジメント(主に、情動の自己管理)の観点から概観する。

〔参考文献〕

- 成瀬悟策 監訳『セルフウォッチング — 悪習慣の自己コントロール』
東京書籍(1984年)(Hodgson, R. & Miller, P. Self watching.
London: Multimedia Publications, 1982.)
- 原野広太郎 著『セルフコントロール』講談社(1984年)
- 内山喜久雄 著『ストレス・コントロール』講談社(1985年)
- 宮下 充正 著『トレーニングの科学的基礎』ブックハウス(1993年)

身体意識の発達と精神病理

春日 喬

生まれたばかりの新生児は、外界の刺激に反応して体を動かしたり、泣いたりするなどの情動反応を示す。しかし、自分の身体を意識したりそれについて思い悩んだりすることはない。つまり、身体感覚はあるが身体意識はまだ未分化である。ヒトの身体意識はどのように発達し、どのように変容するだろうか。また、精神病理がどのようにこれに係わるだろうか。「心と体」という視点からこの問題を考えてみたい。ヒトの身体は新生児期から老年期に至る時間の流れの中で確実に変化する。ヒトがこの事実を知覚するレベルや仕方も変容する。「私という意識」あるいは「自我意識」は、身体と不可分である。その意味では、自我の発達は身体意識の発達を抜きにしては考えられない。ヒトの心と体の関係は、生体という一つのシステムの精巧な仕組みに支えられている。このシステムは、神経系から免疫系にいたるいくつかのサブシステムから成り立ち、生命維持機能をはたしている。

ところで、「心と体」をこれを取り巻く環境という視点から見ると、自我意識や身体意識の適正な発達は、適正な自他関係の中でのみ発達する。これは重要である。人間関係の病理、コミュニケーションの病理は、自我意識の病理をもたらす。それは身体意識の病理に及ぶことになる。現代社会の中で、拒食や過食などの摂食障害が増加しているのはなぜだろうか。現代文明は我々になにをもたらしたのだろうか。現代に生きる中で、現代文明の意味と心身の健康を維持することの意味を考えてみたい。

〔参考文献〕

- ヒルデ・ブルック 著、岡部祥平・溝口純二 訳
『思春期やせ症の謎 — ゴールデンケージ —』星和書店(1979年)
- 時実利彦 著『脳と心、からだの不思議がわかる本』三笠書房(1991年)

心と体 - 心身医学的アプローチ

メンタル・マネジメント

講 日 登

末松弘行

心身医学とは心と体の関係を研究して、その結果を多くの病気の診断と治療に活用しようとする学問である。

心身医学が主要な対象とする病態が心身症である。心身症とは、体の症状を訴えているが、それが心の問題のために起こっていたり、なかなか治りにくくなっているのが心の要因のせいであったりするケースのことをいう。

たとえば、職場でのストレスのために胃潰瘍になったり、家庭内の悩みのために、血圧がなかなか落ち着かない人がいる。

現代のストレスに満ちあふれた生活の中では、心の問題が体の病いに影響することが多く、「心身症の時代」といわれている。

そこで、心身症とは何かをくわしく解説し、ことに女性の心身症について、揺りかごから老年期までライフサイクルにそった観点から「女の一生」ということで話す。

そして、このストレス社会を生き抜くための心身医学的な対応法についても触れて、心と体の相関関係について考える。

〔参考文献〕

- 末松弘行 著『心身症の治し方』主婦の友社 (1988年)
- 末松弘行 監修、野村 忍編『心療内科入門』金子書房 (1993年)
- 末松弘行 監修『心身医学オリエンテーションレクチャー』金剛出版 (1992年)
- 小比木啓吾・末松弘行 編『今日の心身症治療』金剛出版 (1991年)
- 東京大学公開講座『気の世界』東京大学出版会 (1990年)
- 村上陽一郎 編『心のありか』東京大学出版会 (1989年)
- 池見西次郎 著『心療内科』中央公論社 (1963年)

スポーツの中でのところとからだ

魂二木倫

杉山 進

スポーツは現代社会において不可欠の文化になってきたといわれる。そこには行うスポーツだけでなく、みるスポーツという側面もある。

ここでは実践する者の立場から、運動やスポーツの最中のところとからだのあり方を問題にする。

練習時には初心者にとって、自分のからだは意のままにならない障害物として感じられるが、熟練してくるにつれて自身が身体的存在であることも忘れてしまう様な状況に気づくことがある。また名人に至っては所謂心身一如の境地が語られたりする。

実践場面でのからだの現象は多様であり、このようなからだに対する観点は文化的な背景をもち、日本の伝統的な芸能や武道の中に今も生きている。

勝敗や健康・体力といった側面以外のスポーツのもつ意義や意味について考えてみたい。

〔参考文献〕

- 市川 浩 著『精神としての身体』講談社 学術文庫 (1992年)

心と脳

鈴木二郎

心は人そのものということができる。ただ心が単独で存在しているか否か、人である私たちは知ることができない。心は身体とともにあって存在していることは知ることができる。人は心と身体の一統体である。身体は髪一本、爪の先まで含んで構成されており、他ならぬその人のものである。しかし心がそうした末端の部分に存在しているということとはできない。身体の究極の中核である脳とともに存在すると考えられている。この存在するという表現はかならずしも正しくなく、脳が機能してはじめて心が出現するといえよう。

物質系である脳も、単独では存在できず、統一された有機体としての身体にあって存在し、機能している。この機能によって心が発現するのであるから、身体全体の状態、脳の状態によって機能が変化すれば、心も変化することは理解されよう。

脳を含む身体も、心の存在によって統一され、十分に機能する。心を失った身体は独立して存在できず、延命医療によって存在し続ける。また心のあり方、機能によって身体そのものも変化し、この変化は身体の基本単位としての細胞、さらにそれを作り出す遺伝子までも変化させる。

心を物質的にとらえることはできない。しかしそのはたらきはさまざまな形で知ることができる。たとえば思考、感情、意志そしてそれらによって表現される行動、またそれらの総合された表現型としての性格などである。こうした機能は、脳の左右半球の各部位にある程度属する。それでいて全体として脳ははたらき、人は存在する。

人は個々独自の存在であり、統一されている。しかしその統一が、ある時点で分裂し(二重身)、あるいは時間的に連続しない状態(多重人格)がある。人が心と身体の一統体であること、身体の中核としての脳と心との関係をあわせて考えたい。

〔参考文献〕

- 市川 浩 著『精神としての身体』 勁草書房(1975年)
- 川合述史 著『分子から見た脳』 講談社(1994年)
- 西丸四方 著『精神医学入門』 南山堂(1971年)
- エックルス, J. C. (伊藤正男 訳) 『脳の進化』 東京大学出版会(1990年)
- ペンフィールド, W. (塚田裕三 他訳) 『脳と心の正体』
文化放送開発センター出版部
(1977年)

医学と食品

永川 祐三

人は生まれて、生きて、死にます。生きている間だけは、快適に生きたいというのが私たちの念願ですが、その快適な生き方をこわすもの、それが病気です。病んで健康の有難さがわかります。今日、健康の維持・増進と長寿の達成のために、医学と食品の果たす役割は日増しに大きくなってきています。

食品は健康の維持・増進、病気の予防・治療に寄与するなど私たちにとって好ましい機能がある一方、好ましくない機能を示す場合があります。すなわち食品アレルギーの原因になり、また、癌の発生あるいは抑制にも、食品の影響が大きく、機能しているようなのです。

一方、医学、すなわち医学知識や医療技術はめざましく進歩してきており、生命科学は高度に進展してきています。しかし、高齢化社会においては、なにもかも医師にまかせて解決してもらおうという治療第一主義の考え方では、もはや対応できず、生きていくことが困難となってきており、医学・医療がこれまでに経験したことがない転換期にはいつてきています。一人ひとりが生命とはなにかと考え、生きていかなければなりません。すなわち、高度に発達した情報化社会の中で生活し、豊富な医学知識を持ち、自己の病状を自ら判断し、自己の生涯設計の中に治療方針を組み込むことが一人ひとりに求められてきています。

そこで、本講義では、現代医学が科学技術とともに進歩したが、地球環境も破壊されつつある現代社会において、病気、食品、機能性成分の3つの視座からトライアングルに今日の医療と健康を見直してみたいと思います。

〔参考文献〕

- 永川祐三 著『病気治療に必要な食べもの事典』 法研(1994年)
- 永川祐三他 著『'93 医学と食品事典』 朝日出版(1992年)

ストレス

野村 忍

健康という言葉の語源をたどってみると、中国の古典「易経」の中にある「健体康心」からきている。つまり、身体が健(ク)やかで心が康(カ)らかな状態ということができる。WHOの有名な定義にも、「単に身体的に病気でないというだけではなく、精神的にも社会的に良好な状態」とされており、健康の考えかたには古今東西を問わず共通するところがあるようである。そして、心と体をつなぐものは情動であり、この情動にストレスが関係している。ストレスは、自律神経系、内分泌系そして免疫系を介して種々の心身の反応として現れる。

心理社会的ストレスが、心身症や神経症のみならず多くの病気の発症や経過に影響していることは広く認められており、また、成人病は「習慣病」であると言われ、ストレスによる飲酒・喫煙・食行動や行動パターンの変化が二次的に多くの成人病を生み出していると考えられている。したがって、ストレスの評価と対処ということは治療医学的な観点からだけではなく予防医学的な観点、もっと言えば健康な社会生活を送る上でも重要な問題である。しかし、ストレスの認知の仕方、反応の現われ方そして対処の仕方には個人差が大きく、ストレス評価の困難さの大きな要因となっている。

この講座では、ハンス・セリエ以来のストレス研究を解説し、今日問題となっている心理社会的ストレスと病気との関連、ストレスの評価法、ストレス・マネジメントなどのテーマについて考えてみたい。

〔参考文献〕

- 河野友信、田中正敏 編『ストレスの科学と健康』 朝倉書店(1986年)
 末松弘行 監修 野村忍 編『心療内科入門』 金子書房(1993年)
 野村 忍 著『ストレス!心と体の処方箋』 教育書籍(1995年)

女の一生

堀口 雅子

1) 自然界の一員としての人間

土 — 芽ばえ — 蕾 — 開花 — 結実 — 枯朽 — 土
 — 乳幼児期 — 思春期 — 成熟期 — 更年期 — 老年期 —
 どこを捉えても、過去の集積(成育歴)であり、次期への準備期である。

2) 思春期(成熟期への準備期)

自分自身の“からだ心”を知ると同時に、異性との違いを知る。
 お互いを思い遣る心を育てる = 性教育

間脳・下垂体	—	卵巣・子宮	———	月経
		精巣・精管	———	射精

月経は健康のバロメーター：月経異常(月経不順・無月経・月経痛)
 心の占める割合(拒食・過食・体重減少性無月経・スポーツ性無月経)

3) 人間の性と生

下半身の性・人間全体としての性(成育歴)、生殖の性と快楽の性(避妊)
 望まない妊娠のもたらすもの(人工妊娠中絶・出産)
 若年妊娠・出産のもたらすもの・次の世代への責任(福祉)

4) 母性とは? リプロダクティブ・ヘルスとは? 世界の女性たちは今?

〔参考文献〕

- 近藤四郎・大島 清 著『人間の生と性』 岩波新書(1982年)
 繁多 進、大日向雅美 編『母性、こころ・からだ・社会』 新曜社(1988年)
 村瀬幸浩 著『男性解体新書』 大修館書店(1993年)
 堀口貞夫・堀口雅子 著『避妊の教科書』 自由企画・出版(1994年)

「心と体」(95前-II)
「心と体」(95後-II)

生涯にわたる発達

水野 梯一

水野 梯一

発達とはそれを研究する専門領域によってその定義を異にする。従来の医学的観点からは、受精から思春期頃までの上昇的な変化過程でみられる精神と身体の構造と機能の量的、質的な変化を考えていた。しかし、約20年前からこの発達観はかなり変わり、成人期に最高となった構造・機能がその後下行、衰退、老化するものではなく、死を迎える時点まで様々の質的に異なった発達が継続するという概念に移行した。

例えば「走る」という粗大運動機能は確かに思春期に最高点に達し、以後次第に衰える。一方、人生の危機といえるような事態に(受験や事業の失敗)に直面したときの判断能力や立ち直り能力は加齢と共に上昇する。

発達心理学者は知能という概念をいくつかに分類し、言語・社会的知能では記銘といった「流動性」のものは加齢と共に低下するが、文化的知識としての「結晶性」知能は生涯低下せず維持されると述べている。

昔から「老人になると子どもに還る」といわれている。2, 3の事実は確かにこれを証明するが、一致しない多くの事実が知られている。わずか1回の講義で生涯にわたる発達の概念を説明することはできないため、大学での一般的な学習の心がまえと学問的常識に対する受けとめ方を中心に解説する。

参考書：日本語で書かれた『生涯発達』の適切な入門書はない。
教養を身につけるための廉価な「文庫」の乱読を奨めたい(講談社 学術文庫, 岩波文庫, ちくま文庫, 教養文庫など)。

総合コース

◎「少子化時代の子どもと家族」(95期-Ⅱ) 水曜日 5・8時限

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教員が講義するもので、総合的な視野から学ぶものである。

テーマの概要

日本の少子化傾向はますます進行している。少人くらしい子どもが欲しいとしている夫婦であっても現実には平均1.48人しか子どもをもたない。その理由に経済的負担をあげる人が多い。昨年の厚生省の試算によると、子ども1人まで養育する平均1人2千2百円程度は、平均1人2十萬、共働きでベビーシッターなどを雇うとなると平均1人2千2百円程度はねあがるという。その中で「耐久消費財」としての子どもが支流的になり、「消費財」としての子どもが減少している。少子化は、家族関係、文化、経済、社会にどのような影響を与えていくのか。家族社会学、経済学、歴史学、文化人類学、女性学、教育学、心理学などの視点から、少子化の問題性を明らかにすることにより、問題解決の方策を探る。

対象学年：1年～4年

履修単位数：2単位

※複数の履修を履修した場合、卒業までに履修単位数認められる。

セミナー：講義担当教員との質疑応答を中心とした「セミナー」を行う。履修する学生は、必ず出席すること。

◆セミナー：7月19日

講義担当教員に質問事項がある場合は、所定の質問票に記入の上、所属学部事務室(〒107-8302 東京都港区赤坂1-10-1)へ提出すること。
(非常勤講師への質問は、できるだけ講義時間内に行うこと。)

授業活動：学生の自主的行動に基づいて、「図書館利用」や「資料探し」などの授業活動を設定している。

試験方法：試験はレポートにより行う。レポート課題等の詳細は、別途指示する。

◆出題日：7月19日

学生は、指示に従ってレポートを作成し、この巻末の連絡事項付の上、締切り日までに所属学部事務室へ提出すること。

◆締切り日：9月23日

参考文献：参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは入手可能なものをあげた。

総合コース

◇「少子化時代の子どもと家族」(95前-Ⅲ) 水曜日 5・6時限

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教官が講義するもので、総合的な視野から学ぶものである。

テーマの概要

日本の少子化傾向はますます進行している。3人くらい子どもがほしいとしている夫婦であっても現実には平均1.48人しか子どもをもたない。その理由に経済的負担をあげる人が多い。昨年の厚生省の試算によると、子ども1人を22歳まで育てあげるための子育てコストは、平均1人2千万、共働きでベビーシッターなどを雇うとなると平均1人2千2百万円まではねあがるという。その中で「耐久消費財」としての子ども観が支配的になり、「一児豪華主義」の風潮が著しい。少子化は、家族関係、文化、経済、社会にどのような影響を与えていくのか、家族社会学、経済学、歴史学、文化人類学、女性学、教育学、心理学などの視点から、少子化の問題性を明らかにすることにより、問題解決の方策を探る。

対象学年 : 1年～4年

履修単位数 : 2単位。

※複数の講義を履修した場合、卒業までに合計8単位認められる。

セミナー : 講義担当講師との質疑応答を中心とした「セミナー」を行う。履修する学生は、必ず出席すること。

◆セミナー 7月19日

講義担当教官宛に質問事項がある場合は、所定の質問票に記入のうえ、所属学部事務室(7/13まで)へ提出すること。

(非常勤講師への質問は、できるだけ講義時間内にすること。)

図書館活動 : 学生の自主的行動日として、「図書館活動日(7月26日)」(巻末参照)を設定している。

試験方法 : 試験はレポートにより行う。レポート課題等の詳細については、別途指示する。

◆出題日 7月19日

学生は、指示に従ってレポートを作成し、この巻末の表紙を添付の上、締切り日までに所属学部事務室へ提出すること。

◆締切り日 9月29日

参考文献 : 参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは入手可能なものをあげた。

総合コース

◇「少子化時代の子どもと家族」(95前-Ⅲ) 水曜日 5・6時限

[講義テーマ] [担当講師(アイウエ順)]

「少子化」は生物絶滅への道でもある……	石和 貞男	Ⅲ-1
少子化と教育 —教育政策をとおして—	岩木 秀夫	Ⅲ-2
少子化時代の子ども —子育て環境の変容—	内田 伸子	Ⅲ-3
人口の飽和化と近代論	木下 康仁	Ⅲ-4
親子を支える人間関係	黒田 淑子	Ⅲ-5
少子社会と世代間関係	袖井 孝子	Ⅲ-6
地球規模にみる「人口爆発」と 日本における「少子化」	原 ひろ子	Ⅲ-7
少子化と女性問題	樋口 恵子	Ⅲ-8
アラブ・ムスリムの家族関係	三浦 徹	Ⅲ-9
少子化時代における子どもの育ち	無藤 隆	Ⅲ-10
結婚の遅れと向かうべき方向	湯沢 雍彦	Ⅲ-11
中国にみる一人っ子の実態	若林 敬子	Ⅲ-12

(巻末)
図書館活動
授業出席票
セミナー質問用紙
レポート表紙

平成7年度(前期授業)

「少子化時代の子どもと家族」講義日程
(95前-Ⅲ)

開講日時：水曜日 5・6時限 13:20~14:50 (一般教育2号館201室)

前			期		
月	日	講義テーマ 担当講師	月	日	講義テーマ 担当講師
4	19	オリエンテーション 少子化時代の子ども —子育て環境の変容— (心理) 内田 伸子 教授	6	14	「少子化」は 生物絶滅への道でもある (生物) 石和 貞男 教授
	26	アラブ・ムスリムの 家族関係 (史学) 三浦 徹 助教授		21	地球規模にみる「人口爆発」 と日本における「少子化」 (女性文化研究センター) 原 ひろ子 教授
5	10	結婚の遅れと 向かうべき方向 (生活社会) 湯沢 雍彦 教授	7	28	少子化時代における 子どもの育ち (発達臨床) 無藤 隆 教授
	17	中国にみる一人っ子の実態 若林 敬子 非常勤講師 (厚生省人口問題 研究所室長)		5	少子化と教育 —教育政策をとおして— 岩木 秀夫 非常勤講師 (日本女子大学 人間社会学部 教授)
	24	親子を支える人間関係 (発達臨床) 黒田 淑子 教授		12	少子化と女性問題 樋口 恵子 非常勤講師 (東京家政大学 教授)
6	31	少子社会と世代間関係 (生活社会) 袖井 孝子 教授	19	セミナー	
	7	人口の飽和化と近代論 木下 康仁 非常勤講師 (立教大学社会学部 教授)	26	図書館活動	
			9	20	(試験期間)

「少子化」は生物絶滅への道でもある

石和貞男

この講義で、「少子化」に関する生物学上の諸問題のうち、代表的と思えるもの3つを選び論じてみる。

1. 動物の子供の数は何でできるか。

大きい体の動物種は、子供の数が多いことが多い。1個体から生まれてくる子供の子供は、生物種によってさまざまである。また、同じ生物種であっても雌親(あるいは両親)によって子供の子供は違うことが多い。

ところで、子供の子供を生まれる総数ではなく、成熟に達するものの数として考えることにしたい。実際、この数こそが、遺伝学的に重要な意味をもつ。ある動物種の子供の数は、自然選択によってたえず増加する傾向にあるとともに、物理的環境の予測出来ない変化や敵となる生物の進化によって相対的に減少する可能性もある。「小さく生んで大きく育てるとか、少なく生んで多くを死なせず確実に育てる。」ということも、こうした視点から論ずべきものであろう。まず、動物の子供の数は何でできるか、出来るだけ具体例を示しながら生物学的に検討してみたい。

2. 少子化に伴って、その生物集団にどのような変化が生じるであろうか。

地球上の生物は、それぞれ一定の生態的位置を占め、ほぼ数の上で平衡状態を維持している。集団の個体数を一種の自己調整作用によって最適な数に維持しているようである。平均すれば、1個体から新しい世代に1個体(子供)を残す。生命表を作ってみれば、生まれた多数の子供は天敵に食べられたりして成熟個体に至らず死ぬが、生態学にはいろいろな意味のある量として理解できる。この総合コースで言うところの「現代のヒト社会での少子化」は、生物が歴史的に行ってきたこの自己調整とは大いに違う。生物集団に及ぼす影響もおよそ逆である。このことを自然選択の緩和という側面から論じたい。潜在的増殖率を高めながらも、集団個体数はほぼ一定数に保持されるという関係を説明するのは、なかなか複雑で困難だ。しかし、人為的な少子化は、潜在的増殖率を低下させ、集団の活

(次頁に続く)

力を損うことが十分に予測できる。当然ながら、このことを念頭において遺伝子診断、遺伝子治療、生殖技術などがにわかに話題となって来ている。中国においては、1994年10月に母子の健康に配慮した法律を成立させている。こうした「少子化」に伴う、新しい動きについても生物学上の十分な理解が必要であろう。そうして、社会の広範囲な世論の形成が期待される。

3. ヒトは約500個の卵を用意する。

生物の生殖細胞の分化・発達の様子を最新の知識を含めて紹介しよう。卵と精子の形成・成長や受精卵の分裂・分化の過程を検討してみたい。

具体的には、哺乳動物が子供をどのように生み育てて来たかを進化学的な流れで理解できるようにしたい。最後に、「少子化」というテーマと関連して、遺伝学的な最先端の技術などを紹介し、問題点を指摘するようにしたい。ここでは省略するが、「少子化」を促すエソロジカルな(遺伝的である)側面を、生物学上の問題として検討する必要もあろう。

結論

生物の歴史を無視した生き残り戦略としての「少子化」は、生物学的に破綻し絶滅への道を歩む可能性をもつ。

先日、ある講演会で、梅原猛教授(日文研)は、人類が直面する三つの危機をあげた。すなわち、核戦争の危機、地球環境破壊の危機、そして人間内面の崩壊の危機である。これら三つの危機は相互に関連し、かつその根は共通で、西洋文明に由来するものではないか、と主張するのである。「少子化」を私共はどのように認識すべきであろうか。世界人口を調整する動きとして、あるいは、食料・エネルギー問題との関連で評価すべきであろうか。「少子化」は、生き残り戦略としては生物学的には問題がある。これを科学技術で解消しようとする、人間(モラル)崩壊の危機に直面しよう。そして、果して「少子化」が世界レベルの人口調整に意味をなし、地球環境を守る道につながるかどうかとも疑わしい。取り分け、これらの危機から生物世界を救うのは、もっと根本的な見直しを必要とするのに、私達はまだその重要性に気がついていないからだ。

[参考文献]

- 1: 伊藤嘉明ら 著『動物たちの生き残り戦略』NHK ブックス(1990年)
- 2: 木村資生 著『生物進化を考える』岩波新書(1988年)
- 3: S・シンガー 著『人間の遺伝学』東京化学同人(1995年)
- 1,2,3: 中村桂子 著『生命科学と人間』NHK ブックス(1989年)

少子化と教育 — 教育政策をとおして —

岩木 秀夫

本講義では、先ず少子化がわが国の教育の構造に現在及ぼしつつあるインパクトを、初・中等および高等教育におけるこれまでの人口急増・急減対策を踏襲した教育政策や教育計画の動きをとおして素描する。次に、そのような急増・急減対策的な視点が見落としている問題点をとり上げ、その対処を含めて少し考えてみたい。以下にその要点を示しておく。

1. 児童・生徒、学生数減少対策の現状

【小中学校段階】40人学級計画と教員配置改善計画ならびに学校施設の質的整備が進行中であるが、なお「空き教室」問題が深刻であり、生涯教育推進のための学校開放がキー概念とされつつある。【高校段階】公立部門と私立部門が協調して計画的に学級減、学級定員減を進めるという方針が掲げられているが、当面は公 V. S. 私、私 V. S. 私のサバイバル競争が展開される。【大学段階】中央政府レベルで収容定員を計画的にコントロールする政策は変更され、教育内容・進学情報の改善や社会人・外国人学生の受け入れなどによる自助努力が唱えられている。

2. 急増・急減対策の死角

以上のように、政策の現状は従来からの短期・中期的な急増・急減対策である。これが踏襲されている根底には、少子化への楽観視があるが、民間ではより厳しい人口予測や社会経済インパクトのシミュレーションがなされており、中央政府レベルでも厚生省がそれまでの慎重な見方を転換して、少子化を深刻な政策課題と受けとめつつある。教育を単に人口変動の従属変数とみるのではなく、教育が少子化の独立変数でもあることを視野に入れた政策が、今後考えられるべきである。

〔参考文献〕

- 喜多村和之 編『学校淘汰の研究—大学「不死」幻想の終焉—』東信堂 (1989年)
- 尾崎護・貝塚啓明 監修『人口変動と日本の進路』ダイヤモンド社 (1994年)

少子化時代の子どもの育ち

— 子育て環境の変容 —

内田 伸子

少子化により、第1に子ども同士の関係の変容、第2に母子関係の変容がもたらされた。第1については、子どもの発達において子ども同士のやり取りが不可欠であることを指摘する。第2については、「一児豪華主義」が早期教育の異常な加熱化をもたらし、子どもが思い通りに育たぬことから乳幼児虐待に走る。これらが、子どもの発達にどんな歪みをもたらすのかについて問題点を指摘する。早期教育も虐待も、子どもを意のままにコントロールしようとする点では同じであること、このような状況がもたらされた背景には社会の育児機能の低下や体罰肯定論などの価値観があり、同時に母親自身の問題として核家族化にともなう閉塞状況や子どもが少ないことからくる子どもの育ちへの理解不足などの要因が関わっていることを指摘する。最後に、このような状況を打開するために、第1に母親の子ども理解を促し、第2に社会の育児機能を復元するための方策を提案する。

〔参考文献〕

- A・ミラー 著、山下公子 訳『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』新曜社 (1983年)
- 原田正文 著、『育児不安を越えて—思春期にひらく子育て—』朱鷺書房 (1993年)
- D. エルキンド 著、幾島幸子 訳『ミスエデュケーション—子どもをむしばむ早期教育—』大日本図書 (1991年)

人口の飽和化と近代論

木下 康仁

この講義では「飽和化」を中心概念とし、少子化現象の背景を近代論の観点からマクロ的に考察する。飽和化にはニュアンスとして、限界点が近づいているという意味と、にもかかわらずその先に何かあるのか定かではないといった不確定感が含まれている。パラダイムの転換を予感させる概念であり、単に人口面だけでなく、社会システム、モノ、ライフサイクル、そして人々の意識まで形容し得る概念でもある。

すなわち、少子化現象を近代という時代の飽和段階を象徴するものの一つとしてとらえ、歴史的、政治経済的、社会的、医療・福祉的および社会心理的パースペクティブからアプローチすることにより、近代社会の成熟とその結果としての新たな問題群を明らかにする。

〔参考文献〕

- 古田 他 編『人口減少ショック』 PHP研究所 (1993年)
- 木下康仁 著『福祉社会 スウェーデンと老人ケア』 勁草書房 (1992年)

親子を支える人間関係

黒田 淑子

「少子化」は現代の親子・家族の生活にどのような影響を及ぼすのだろうか。また、家庭、学校、地域社会でつくられていく子どもの生きる基盤となる人間関係はどのように変わっていくのだろうか。この講義では、人間関係を軸に、少子化に伴う時代の変化について論じると同時に、複雑な人間生活の事象を、安易に、短絡的に、「少子化」に結びつけてしまう危険性にもふれ、問題・課題の重層的な把握のしかたについて述べる。時代とともに変わるもの・変わらないものに言及しながら。

1. 子どもをめぐる人間関係 子どもは、この地球に生を受け、人や物との関係における子どもとして生き始める。ここでは、親子関係、きょうだい関係、祖父母世代との関係、友人関係、保母・先生と関係、相談者との関係、第三者・訪問者との関係など、子どもと共に生きる人々との関係における問題・課題を提起する。
2. 少子化時代の親子関係の特色・問題点 親子・家族にみられる人間関係の本質的なモデルを提示しながら、「少子化」がどのような変容をもたらすか、その特色・問題点について、子どもの視座、親の視座、関係の視座から論じる。
3. 支えあう人間関係—市井の“補助自我”の役割— 子育て支援の実態を紹介しながら、日常生活において、自発的に、相互に支えあう人間関係がどのようにつくられていくかについて、“補助自我”を手がかりに概説する。

〔参考文献〕

- 諏訪義英・諏訪きぬ 著『男女共生時代の保育・教育』 明治図書 (1994年)
- 大江健三郎 著『「家族のきずな」の両義性』 (大江 著『あいまいな日本の私』 岩波新書 1955年)
- 黒田淑子 著『生きることと人間関係—心理劇の活用—』 学献社 (1988年)

少子社会と世代間関係

袖井 孝子

平均寿命が50歳を超えることのなかった第二次大戦以前には、幼少期に親の死に直面したり、孫の顔を見ることなくあの世へ旅立つ者も珍しくはなかった。しかし、少産少死の現代社会では、四世代家族や五世代家族も出現している。かつて都市化社会において核家族は孤立化するといわれたが、都市化の進んだ先進諸国でも老親と子どもや孫との間には頻繁な援助の授受や緊密な交流が存在することが明らかにされている。

上の世代に比べて、下の世代が相対的に小さい少子社会では世代間関係は一層複雑化する。一人の子どもに両親、四人の祖父母、さらに何人かの曾祖父母が生存している場合、子どもが幼い頃には過剰な贈り物攻勢が行なわれ、溺愛が子どもの正常な発達を妨げることもありうる。だが、子どもが成人に達した後は、過剰な扶養介護負担がかかってくる。

講義においては、諸外国や日本における実態調査の結果を手掛かりに、老年世代と他世代との関係の特徴や親族ネットワークが果たす機能を明らかにし、さらにそれが将来どのように変化するかを考えたい。

〔参考文献〕

上子武次・増田光吉 編著『三世代家族』 垣内出版(昭和51年)
副田義也 編著『日本文化と老年世代』 中央法規出版(昭和59年)
正岡寛司・望月 嵩 編『現代家族論』 有斐閣(昭和63年)
袖井孝子「家族の中の老人」、伊藤光晴他編『老いの発見4 老いを生きる場』 岩波書店(1987年)

1995.6.21

地球規模にみる「人口爆発」と 日本における「少子化」

原 ひろ子

地球環境は、どのように変化し、生物多様性の保持は、どのように保障されるのでしょうか？

文化(ときには文明)をもつ生物としてのヒトは、自らの子孫たちに対して、どのような責任を担っているのでしょうか？さらに、地球上の他の生物たちに対して、どのような責任を担っているのでしょうか？「有為転変は自然界の理」であるとしても、これからヒトは、種として、さらに国家の国民として、あるいは家族の一員として、またあるいは一人の個人として、「地球を構成する一要素」としての自らを、どのように考えていくのでしょうか？

日本、ドイツ、フランス、カナダ、などの国に生まれて、いわゆる「中流」の生活を営む一人の人が一生涯に消費するエネルギー量は、開発途上国に生まれて生活する人の場合の何十分、ときには何百人分に相当するといわれます。

- ①一つの国を単位として考えられる「人口政策」の妥当性を吟味する力を、国民ひとりひとりが主体的に身につけることは必要か否か？
- ②グローバルにヒト(人類)の将来を考えつつ、異質な文化や価値観をもつ人々が共存する上で、「人口爆発」といわれる現象と、エネルギー問題を、どのように考えるのか？生物多様性の保全をどのように考えるのか？
- ③日本の少子化は、上記のような視座にたつとき、どのように見えてくるのか？
- ④日本の「少子化」は「問題」であるのか？
- ⑤「少子化時代」の子どもの主体性は、どのように保たれるのか？

〔参考文献〕

レスター・R・ブラウン 編『ワールド・ウォッチ 地球白書'94-95』
ダイヤモンド社(1994年)
原ひろ子・館かおる 著『母性から次世代育成力へ』 新曜社(1991年)

1991.2.15

少子化と女性問題

樋口 恵子

「多産多死から少産少死へ」の変化は1970年代から始まった。1990年に前年の合計特殊出生率(一人の女性が生涯平均何人の子どもを産むかの推計)が、1.57に落ち込んだことは、日本の社会に「1.57ショック」という現象をもたらした。

この出生率の低下がもたらした日本の少子化は、女性の意識とどのように関わっているのだろうか。家族・結婚・労働・教育・高齢社会などとの関係、そして、日本の女性の未来像に与える影響について考察したい。

また、少子化は男性にとってどのような問題なのか、男性と家族・結婚・企業社会と労働などから男性問題としての側面も明らかにしたい。

〔参考文献〕
「女の人権と性」実行委員会 編『女はなぜ子どもを産まないのか』
-出生率低下を考える-
東京；労働旬報社(1991年)

アラブ・ムスリムの家族関係

三浦 徹

アラブの家族は、現在でも子供の数は多く、また祖父母、父母、子供の3世代が同居する例は多い。私が昨年約9カ月をすごしたダマスカス(シリア)で、45歳の大家は16歳の長男を筆頭に下は3歳の女子まで5人の子持ちである。よく私の子供の数を聞かれたが、二人と答えると、どうしてももっとつくだらないのかといふかしがられる。そこで私は、いかに日本では教育費が高いかを説明することになっている。年上の子供たちは、家の仕事や用事を手伝い、とくに長男は早くから父親の代役としてしつけられる。彼らにすれば、大学をでるまで勉強だけしてればよいなどという現代日本の子供のあり方は、想像を絶するものがある。

アラブの家族は伝統的には、父系血縁を中心に構成され、それは、「某の子(イブン)」と父親の名を冠した命名法によく表われている。家族関係は一見家父長的にみえるが、相続では、イスラム法に基づく分割相続が行われ、妻が1/8、残りは子供の間で均等に(但し女は男の1/2)分割される。女性が不動産を所有したり、これを売却購入する例は、法廷文書のなかに多数確認できる。成人女性については、独特の女性隔離の規定があるが、これは女性を差別するためのものではなく、本来は敬して保護するためのシステムと考えられる。講義では、1父系の集団原理、2相続にみる家族関係、3女性と家族について、歴史史料と現地での経験談をまじえて、とりあげる。

〔参考文献〕
片倉もとこ 編『イスラーム教徒の社会と生活』(講座『イスラーム世界』
第1巻、栄光教育文化研究所 1994年)

少子化時代における子どもの育ち

無藤 隆

少子化時代とは、小さい子どもがいる家庭が減ることを主に意味するだろう。その結果、子どもにとっては、小さい時期に接することのできる相手が、大人が中心になり、子ども同士の触れ合いが減る危険がある。それが子どもの成長にとって何を意味するだろうか。一つは、対等な人間関係での技能を習得する機会が減る危険である。もう一つは、家庭や地域での子どもの減少を補う形で、幼稚園や学校が持つ比重が高くなり、そのことがもたらす特徴である。特に、狭い空間での少数の接触と固定的人間関係の問題がある。それらのことから、現代での人間関係の特徴のいくつか、例えば、少数の親しい人と付き合う傾向や、いじめの深刻化などが由来している面もあるように思える。

〔参考文献〕

無藤 隆・やまだようこ 編『生涯発達心理学講座、第1巻』金子書房 (1995年)

結婚の遅れと向かうべき方向

湯沢 雍彦

日本社会全体としてみればたしかに少子化は進んでいるが、(15年以上続いている)夫婦についてみれば、その出生子数は平均2人以上あって、この20年間ずっと安定している。少なくとも日本では、非婚(結婚しない)ないし遅婚(遅く結婚する)こそ少子化の最大原因であるといえる。

ではなぜ、近頃の若者(とくに女性)は結婚を避ける(避婚)のか。欧米には見られないと言われるこの現象の原因を、私自身行った3種の調査例を紹介して検討してみたい。そして最後に、この解決のためにはどういう方向へ生活構造を転換すべきかを一緒に考えてみよう。

〔参考文献〕

地域社会研究所『現代結婚考』コミュニティ97号 東京;地域社会研究所(1992年)
大橋照枝 著『未婚化の社会学』東京;NHKブックス(1993年)
湯沢雍彦 著『新版・図説現代日本の家族問題』東京;NHKブックス (1995年5月刊予定)

中国にみる一人っ子の実態

若林 敬子

きたるべき21世紀において地球的規模で最大の問題は、環境、資源エネルギーとならんで人口問題であるといわれている。

世界人口57億の12億、22%を占める人口超大国・中国では、1979年以来、厳しい賞罰制度と徹底した人口管理による、いわゆる一人っ子政策を実施している。この歴史上例をみない壮大な「実験」は、どのような教訓を残したであろうか。以下のような内容から考えていきたい。

- 1 世界の人口爆発とカイロ会議
- 2 中国の一人っ子政策の意味と推移
- 3 伝統的子女観と家族制度への影響
- 4 出生性比の不均衡と戸籍のない子の増大
- 5 人口流動“盲流”と都市・農村論
- 6 人口高齢化と扶養制度の揺らぎ
- 7 一人っ子の教育問題と21世紀の中国・日本への影響

〔教科書〕

若林敬子 著『中国 人口超大国のゆくえ』岩波新書(1994年)

〔参考書〕

若林敬子 著『ドキュメント・中国の人口管理』亜紀書房(1992年)

若林敬子 著『中国の人口問題』東京大学出版会(1989年)

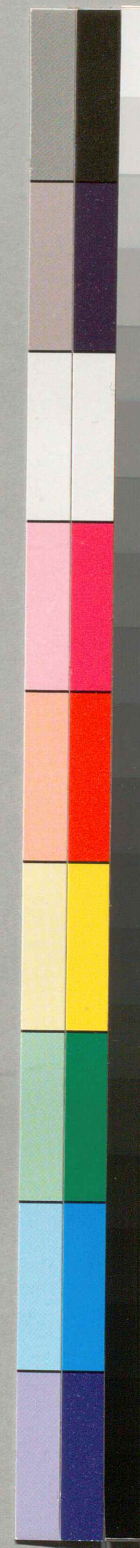
図書館活動

この週の目的は各自が文献・資料を図書館の中で探索するのを促進することにある。入学時の図書館についてのオリエンテーションをよく思い出してほしい。そして、まず開架になっている部分を隅から隅まで一度は歩いてみて、棚の上から下まで目を通すことを勧める。数字による本の分類方法を知るだけでなく、哲学関係がどの辺に、美術関係が、どの辺に、という具合に本学図書館の地理を覚えてしまおう。次に参考室の部分についても同じことを行い、百科辞典、言葉の辞書、専門の辞書、年鑑、文献要旨の類がどの辺にあるかも覚えておこう。これは帯出が出来ないものであるが、自分が必要な時に誰かが図書館内で使用していることがあるので、一度は見ておいたほうがよい。

次にカードで素早く検索する方法を実習してみよう。日本でも欧米でも、カードのかわりにコンピュータだけで検索するところが増えている。本学にも、平成2年度からコンピュータを使ったLOOKS/Uというシステムが利用できるようになった。利用者用の端末機が2階の目録室(本の貸出と返却を頼むカウンターの前)にあるので、ぜひ慣れておこう。本学の本がすべてこのシステムで検索できるようになるのには時間がかかるが、これからはこうした方式を使いこなせないと、よその大学や図書館に行っても仕事にならなくなる。

このシステムのためにも、また、わが大学にない文献を図書館を通じて他の機関から借りてもらうためにも、また、レポートや卒論を書くためにも、読みたい単行本や雑誌論文の記録をしっかりと作る習慣をつけておこう。たとえば、「シバタという人の音楽史の本」といった曖昧な記録ではなく、柴田 南雄：『西洋音楽の歴史(上)』東京；音楽之友社、昭和42(1967)、というように、著者の姓と名、書名、出版地、出版社、出版年を忘れないように。日本の本の場合は、東京に限って出版地を省略することがあるが、最近では東京以外の本も多いので確認すること。この本をお茶の水女子大学から借りようと思ったら、自分のノートにも請求記号「762.3/Sh18/1」と、この本の配備部局である「図書館」と「音楽」の文字を記しておこう。雑誌論文の場合は、著者名、題名の他、雑誌名、巻号、発行年の他、始めと終わりの頁を忘れないこと。外国語の本や論文でも同じ情報が必要である。

なお、音や映像による情報を使う場合は、附属図書館の閲覧カウンターに申し出て視聴覚コーナーを利用するとよい。



題 名

あるところまで要領する... 平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票

授 業 出 席 票

※この出席票は、各授業の終了時に提出すること。「学問と私」

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
○ 月 日 講師名
学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
○ 月 日 講師名
学籍番号 学部 学科() 年 氏名

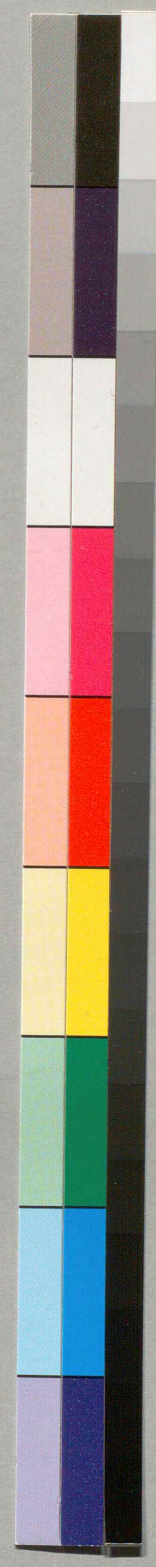
平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
○ 月 日 講師名
学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
○ 月 日 講師名
学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
○ 月 日 講師名
学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
○ 月 日 講師名
学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
○ 月 日 講師名
学籍番号 学部 学科() 年 氏名



平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

※この出席票は、各授業の終了時に提出する。

授
業
出
席
票

「学問と私」

※この出席票は、各授業の終了時に提出すること。

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

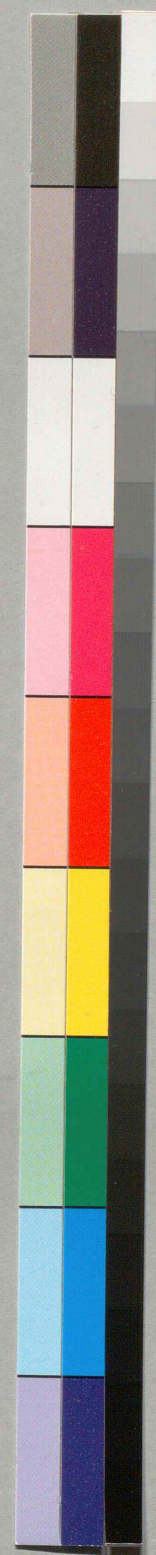
平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 ○ 月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名

平成7年度「学問と私」(95前・後-I)出席票
 セミナー 月 日
 学籍番号 学部 学科() 年
 氏名



平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

※この出席票は、各授業の終了時に提出すること。

授
業
出
席
票

「心と体」

※この出席票は、各授業の終了時に提出すること。

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

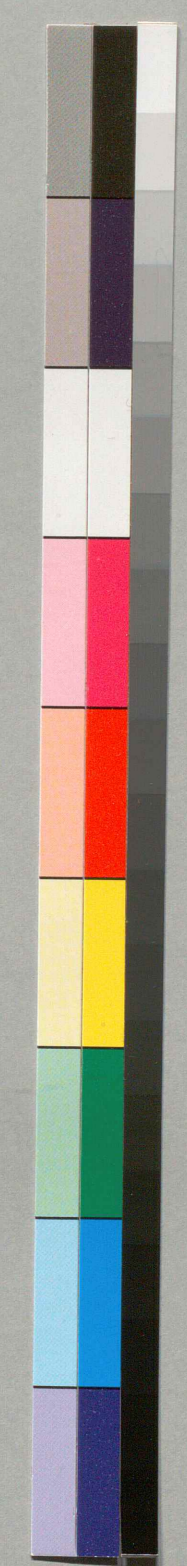
平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名

平成7年度「心と体」(95前・後-I)出席票
 ○月 日 講師名
 学籍番号 学部 学科() 年 氏名



授
業
出
席
票

※この出席票は、各授業の終了時に提出すること。
「心と体」

平成7年度「心と体」 (95前・後-I) 出席票			
○	月	日	講師名
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

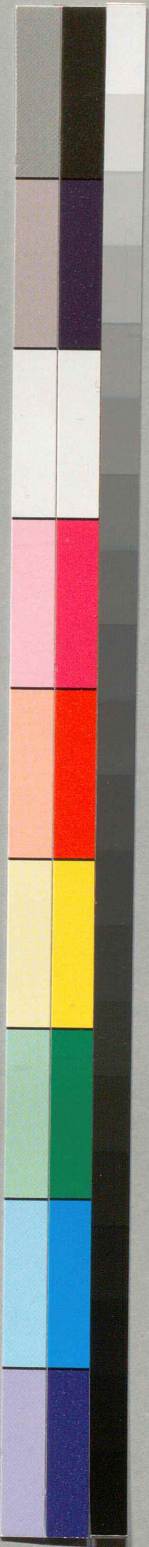
平成7年度「心と体」 (95前・後-I) 出席票			
○	月	日	講師名
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「心と体」 (95前・後-I) 出席票			
○	月	日	講師名
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「心と体」 (95前・後-I) 出席票			
○	月	日	講師名
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「心と体」 (95前・後-I) 出席票			
○	月	日	講師名
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「心と体」 (95前・後-I) 出席票			
セミナー		月	日
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	



授
業
出
席
票

「少
子
化
時
代
の
子
ど
も
と
家
族
」

※この出席票は、各授業の終了時に提出すること。

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 4月 19日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 4月 26日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

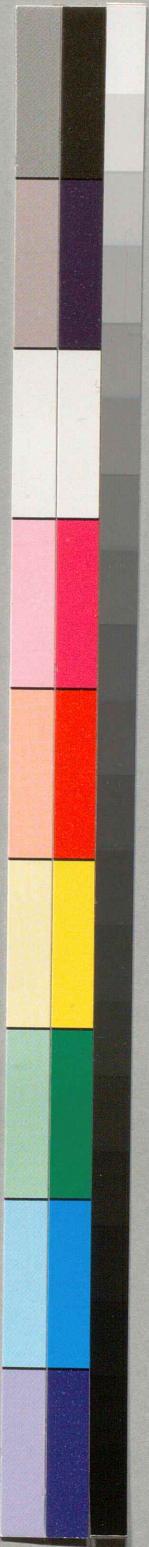
平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 5月 10日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 5月 17日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 5月 24日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 5月 31日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 6月 7日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	



授
業
出
席
票

「少
子
化
時
代
の
子
ど
も
と
家
族」

※この出席票は、各授業の終了時に提出すること。

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 6月 14日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

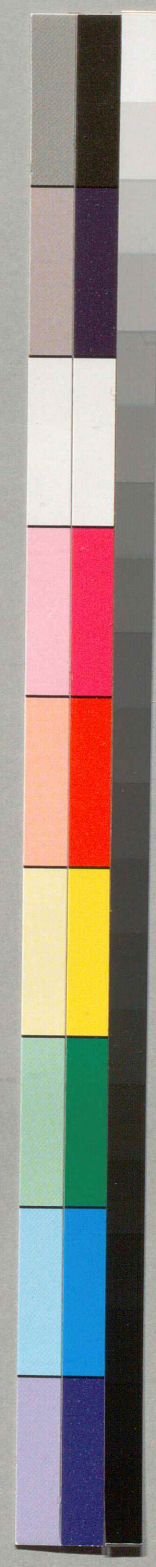
平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 6月 21日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 6月 28日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 7月 5日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
○ 7月 12日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	

平成7年度「少子化時代の子どもと家族」(95前-III) 出席票			
セミナー 7月 19日 講師名			
学籍番号	学部	学科 ()	年
		氏名	



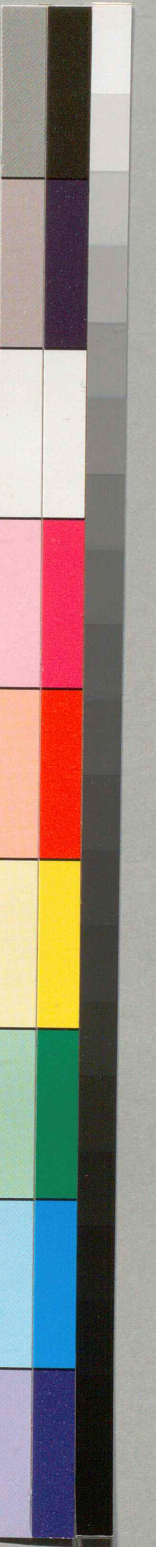
質問用紙 (各講師宛の質問)

提出期限：◆前期授業 7月13日(木)まで ◆後期授業 1月25日(木)まで
提出先：各学部事務部

平成7年度「		」(テーマ名)		講師名
学部		学科()	年	氏名
質 問 事 項				

平成7年度「		」(テーマ名)		講師名
学部		学科()	年	氏名
質 問 事 項				

平成7年度「		」(テーマ名)		講師名
学部		学科()	年	氏名
質 問 事 項				



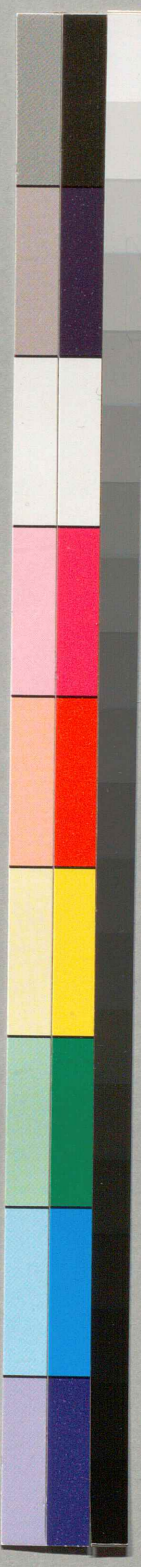
質問用紙 (各講師宛の質問)

提出期限: ◆前期授業 7月13日(木)まで ◆後期授業 1月25日(木)まで
提出先: 学部事務部

平成7年度「 」(テーマ名) 講師名	
学部 学科() 年 氏名	
質問事項	

平成7年度「 」(テーマ名) 講師名	
学部 学科() 年 氏名	
質問事項	

平成7年度「 」(テーマ名) 講師名	
学部 学科() 年 氏名	
質問事項	



(開演の時間) 18時 19時 20時
11(木) 12(金) 13(土) 14(日) 15(月) 16(火) 17(水) 18(木) 19(金) 20(土) 21(日) 22(月) 23(火) 24(水) 25(木) 26(金) 27(土) 28(日) 29(月) 30(火) 31(水)

各曜日 (21-1) 1	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
各曜日 () 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	

各曜日 (21-1) 1	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
各曜日 () 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	

各曜日 (21-1) 1	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
各曜日 () 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	

コア科目
一般教育科目

総合科目 総合コース

平成7年度 レポート

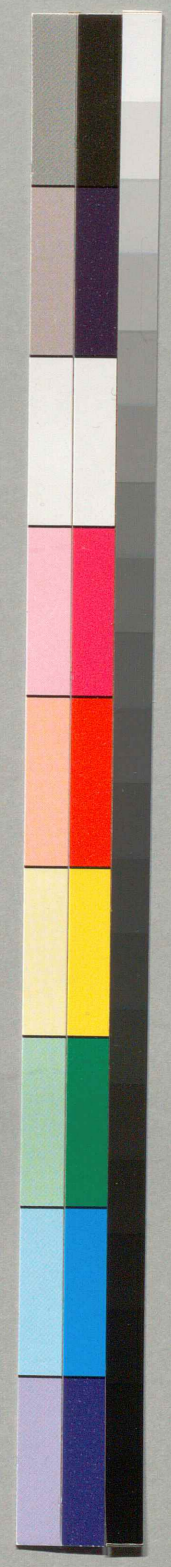
学問と私 (95前-I)
(95後-I)

- 前期授業の提出期限 9月29日(金)
- 後期授業の提出期限 2月16日(金) — ただし、4年生(卒業予定者)は、2月6日(火)まで

教官名	
課題 (テーマ)	

学生氏名				学籍番号	
学年	学部	学科	講座・専攻		

お茶の水女子大学



目録
目録

目録

目録

(1-1)

(1-2)

目録

(金) 日 0 3 月 0 日 期限出題の業務報告

(金) 日 0 1 月 5 日 期限出題の業務報告

(火) 日 0 1 月 0 日 (金) 日 0 1 月 0 日

お茶の水女子大学

コア科目
一般教育科目

総合科目 総合コース

平成7年度 レポート

心と体 (95前-II)
心と体 (95後-II)

○前期授業の提出期限 9月29日(金)

○後期授業の提出期限 2月16日(金) - ただし、4年生

(卒業予定者)は、2月6日(火)まで

教官名	
課題 (テーマ)	

学生氏名		学籍番号	
学年	学部	学科	講座・専攻

お茶の水女子大学

目録
目録

スーに合部 目録合部

イ一ホノ更中イが平

(五-前30)
(五-前20)

木 心

(金) 日05月0 期限出野の果更前前○

金) 日01月3 期限出野の果更前前○

サモ(火) 日01月1, 日(金) 日01月3

	教 官 名
	課 題 (テーマ)

学年	学部	学科	講座・専攻
----	----	----	-------

学大子文水の茶法

コア科目
一般教育科目

総合科目 総合コース

平成7年度 レポート

少子化時代の子どもと家族 (95前-Ⅲ)

○提出期限 9月29日(金)

教 官 名	
課 題 (テーマ)	

学生氏名	学籍番号						
学年	学部	学科	講座・専攻				

お茶の水女子大学

目録マロ

目録青磁録一

マ一ロ合録 目録合録

マ一ロ合録マ一ロ

(目一前28) 遊家らよる子の外割分千少

(金) 日02月0 期前出脱0

	各言遊
	目一ロ

	半部遊半	各言遊半
遊家・遊家	目一ロ	目一ロ

半大千定本0定本

